

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 31 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25284149

研究課題名(和文) 東中欧・ロシアにおける歴史と記憶の政治とその紛争

研究課題名(英文) Politics of Histories and Memories and Conflicts in Central and East European Countries and Russia

研究代表者

橋本 伸也 (HASHIMOTO, Nobuya)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：30212137

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,500,000円

研究成果の概要(和文)：東中欧諸国・ロシアで深刻の度を増している第二次世界大戦と社会主義時代の歴史と記憶をめぐる政治化と紛争化について、現地調査や国際研究集会の開催などを通じて、実相解明を進めた。

6回の国内研究会の開催、個別研究論文の執筆に加えて、2014年度にはエストニアのタリン大学で夏季ワークショップを開催して成果をproceedingsとして公開するとともに、2015年には関西学院大学で国際会議を開催して、東アジアの歴史認識紛争との対比により問題構造の多元的把握に努めた。

研究代表者の単著(既刊)や雑誌特集号に加えて、2017年中に国際的な論集と研究分担者らの執筆した共著書2点の刊行が決まっている。

研究成果の概要(英文)：The members of the research project have developed the analysis of politicization of histories and memories of the WWII and Socialism in Central and Eastern European countries and Russian Federation, which have become more and more serious conflicts in and between these countries, on the grounds of fieldworks and the collection of materials in these countries.

In the summer of 2014, we held an international workshop in Tallinn, Estonia, and an international conference in Kwansai Gakuin University in Japan, through which we discussed with foreign researchers and developed the comparative framework for history and memory conflicts between Eastern Asian experiences and Eastern European ones. The proceedings of Tallinn workshop is uploaded to the Repository at Kwansai Gakuin University.

The members of the project have already some articles, books and a special issue of the journal, and are preparing other two books in this framework, inviting foreign contributors.

研究分野：西洋史学

キーワード：ロシア 東中欧 歴史認識 記憶 第二次世界大戦 社会主義 紛争 国際共同研究

## 1. 研究開始当初の背景

冷戦終結と体制転換、ヨーロッパ統合の進展は、歴史と記憶をめぐるナショナルな語りを相対化し、単一のヨーロッパ・アイデンティティとヨーロッパに共通する歴史認識構築への期待を喚起した。他方、ドイツを中心に組み込まれた隣国との歴史対話や共通歴史教科書編纂の努力は、対立した諸国間の和解への試みとして日本でも注目を集め、歴史認識上の深刻な亀裂を抱えた東アジアにとっての範例として高く評価されてきた。戦争をめぐる歴史と記憶の共有と相互承認による和解と平和構築への期待は、広く思想界全般で多様な議論として発展していた。

だが、ヨーロッパにおける歴史認識の共有化は、その東部を視野に入れた場合、さほど楽観視できるものではなかった。社会主義体制崩壊後、とりわけ今世紀転換期以降、大戦期と社会主義体制のもとでの国家犯罪や非人道的行為の実相が明るみに出されるなかで、歴史認識にかかわる深刻な葛藤と紛争がより顕在化してきたといわなければならない。本研究を着想した時点の状況は、およそヨーロッパ総体における歴史認識の共有化を楽観視できるようなところにはなかった。

しばしば語られる予定調和的な「ヨーロッパ共通の記憶」への期待にもかかわらず、現代史認識が東西軸に沿って分裂していることを指摘したのはコンラート・ヤーラオシュらであった。それによれば、第二次世界大戦をめぐる歴史と記憶は

- (1) ファシズムへの民主主義の勝利を頌える西欧
- (2) 多大の責任を負った敗戦国として複合的トラウマを抱えたドイツ等の西中欧
- (3) ナチズムと社会主義を等値視し、後者の摘発に力点を置いて「全体主義」による「占領」支配（大量殺戮・強制労働・暴力・追放など）を指弾する東中欧
- (4) 「ヨーロッパ解放」の功績を誇示するロシアの「大祖国戦争」史観

という像に分断され、各々がさらに複雑な様相を呈している（Cf., Jarausch, Konrad H. and Thomas Lindenberger (eds.), *Conflicted Memories: Europeanizing Contemporary History*, New York, Berghahn Books, 2007. Pakier, Malgouyres and Bo Stråth (eds.). *A European Memory? Contested Histories and Politics of Remembrance*, New York, Berghahn Books, 2010.）。こうした歴史像をめぐる葛藤・対立は、EU・NATO の東方拡大の進展や第二次大戦終結 60 周年を契機に顕在化させられ、

ロシアと東中欧諸国に留まらず、EU も関与した歴史と記憶をめぐる政治は緊張の度を強めてきた。その際、(3)と(4)との対立にとどまらず、ホロコーストの唯一無比性を自明視する(1)や(2)と(3)の間にも乖離が存在する。「全体主義」史観を採用する(3)内部でも、スロヴァキアとチェコ、ハンガリー間の対立など、第二次大戦以前の複雑な民族間関係や隣国との国家間関係に規定された経路依存的な対立要因がある。そうした東中欧・ロシアにおける深い葛藤をはらんだ事実、もっぱら先進事例に着目する日本ではほとんど看過されてきたというのが実情であった。

## 2. 研究の目的

本研究は、体制転換後の東中欧およびロシアにおける歴史記述、とりわけ第二次世界大戦および社会主義体制下の歴史的経験に関する歴史と記憶の変容を、各国における「歴史と記憶の政治」の展開および、それらをめぐる諸国間協力と対立・紛争化という視点を媒介させて把握しようとするものである。とりわけ、バルト諸国を含む東中欧諸国で掲げられた「占領」・「全体主義」史観とロシアにおける「大祖国戦争」史観との対立が、欧州連合の歴史政策をも巻き込みながら、当該地域における国際政治上の争点となっていることに着目し、ヨーロッパ総体における歴史認識の共有化の困難とその打開という同時代的な問題の解明を目的とする。

## 3. 研究の方法

上記の目的の達成のために本研究では、次のような下位課題を設定した。

- (1) 「歴史と記憶の政治」を推進する国家機関（ポーランド「国民記憶院」、ロシアの「ロシアの国益を損なう歴史歪曲に対抗する大統領委員会」等）の目的・任務・構造・活動内容とその成果。
- (2) 各国の「公定」ないし主導的現代史像の把握と分析。とりわけ第二次世界大戦の全般的性格づけと自国にとっての意義や戦争関与のあり方、対ナチ協力やホロコースト関与、対ソ関係と戦後社会主義体制期についての歴史叙述等が論点となる。
- (3) 各国の現代史像構築に際してその前提として活用される民族的・歴史的記憶や知的資源の把握。両大戦間期の歴史的経験、近代ないしそれ以前の国制との連続性、国民/民族的な歴史的英雄と「記憶の場」の活用、それらの現代史への接続のされ方などが問題となる。
- (4) 「歴史と記憶の政治」にたいする推進・

抑止要因として作動する個々人・諸集団の歴史的記憶のあり方と国民的な歴史意識の形成の問題。これは、歴史認識が国内の民族集団など諸集団間あるいは個人間の共感や葛藤の場として機能する局面を取り出すこととなる。

(5)各国の「歴史と記憶の政治」と対外的な紛争化の把握。対 EU (西欧)・ロシアに加えて、スロヴァキアとハンガリー、ポーランドとリトアニアなど、東中欧圏内の隣国との複雑な関係が「歴史と記憶の政治」にさいしてどのように意味づけられ利用されているのかも重要な論点である。

(6)国策的な「歴史と記憶の政治」とそれに追従する歴史「研究」の流布にもかかわらず、これに批判的な歴史家のあいだで成立する国際的な協働と歴史認識共有化の契機の説明。

研究遂行に際しては、代表者・分担者・協力者がそれぞれ専門とする国・地域を担当して、それぞれの国・地域における上記の問題群にかかわる情報・資料の収集と検討、それに基づく情報交換、認識の共有化を図ることとした。また、当該国・地域の研究者との交流や情報交換を重視し、国際的なワークショップやカンファレンスの開催や、その成果の刊行を通じた理解の共有化を進めることとした。その際に、上述の通り、歴史認識や記憶の紛争化が顕著な東アジアの経験との対比や接続に留意し、むしろポスト冷戦期の国際政治における共通する問題群として把握することを重視した。

#### 4. 研究成果

本研究課題の遂行期間を通じて、日本人メンバーによる国内研究会を合計 6 回行ったのに加えて、2014 年 8 月にはエストニアのタリン大学で日本人メンバーに加えて現地研究者も参加したサマー・ワークショップを、さらに 2015 年 11 月には関西学院大学で多数の外国人招聘研究者を含む国際カンファレンスを開催した。

また、研究代表者・分担者・協力者がそれぞれ雑誌論文等を発表したのに加えて、複数の出版の企画化を進め、すでに刊行済またはそのための準備中である。

#### 国内定例研究会

国内研究会では代表者・分担者・協力者がそれぞれ担当国・地域について情報の提示・交換を行ったのに加えて、それぞれ研究目的及び下位課題にそくしてテーマを設定して研究報告を実施した。具体的には、ロシアの歴史政策と歴史教科書問題、ポーランド・ウ

クライナ間の歴史認識問題、「正常化」時代のチェコスロヴァキアの大衆的記憶、ルーマニア共産党の「犯罪」に関する記憶、エストニアとモルドヴァの歴史・記憶政治の比較、ルーマニアにおけるホロコースト認識の問題、ハンガリーの歴史認識と両大戦間期の復権の問題などである。

国内研究会ではさらにゲスト研究者を招聘し、平野千果子・武蔵大学教授にはフランスの「記憶法」について、藤永壮・大阪産業大学教授には韓国の「過去清算」について、それぞれ研究報告をしていただいた。これらにより東中欧・ロシアにおける歴史・記憶政治の展開をより広域的な文脈において理解できるようにした。

#### サマー・ワークショップ

2014 年 8 月にエストニアのタリン大学で実施したサマー・ワークショップ「Politics of Histories and Memories and Conflicts in Central and East European Countries and Russia」では、以下のような研究報告および研究分担者によるコメント・討論を行って、東中欧・ロシアと東アジアそれぞれにおける歴史・記憶政治とその紛争化との対比に関わる枠組みの設定を試みた。

Memory Politics in Estonia (Raivo Vetik, Tallinn)

Academic and Popular Representations of the Recent Past on the Example of Estonia (Olaf Mertelsmann, Tartu)

Memory and Identity: Memory Conflicts in Polish-Ukrainian and Polish-Russian Relations (Małgorzata Głowacka-Grajper, Warsaw)

Comparative Framework of History and Memory Conflicts between Eastern Europe and Eastern Asia (Nobuya Hashimoto, Nishinomiya)

このワークショップの成果は、報告にくわえてコメント及び総括議論を収載したプロシーディングスとして印刷・公刊するとともに、関西学院大学リポジトリ上で公開した (<http://kgur.kwansei.ac.jp/dspace/handle/10236/13007>)。

#### 国際カンファレンス

最終年度の 2015 年 11 月 28 日、29 日に関西学院大学で開催した国際カンファレンス「Politics of Memories and Histories and the Conflicts: Comparison and Dialogue between East and West of Eurasia」(京都大学人文科学研究所「現代/世界とは何か? 人文学の視点から」共同研究班、日韓西洋史フォーラムなどと共催)は、招聘外国人研究者 6 名を含む総勢 60 名程度の参加者を得て開催した。その内容は以下のとおりである。

## Keynote

Prof. Konrad H. Jarausch [North Carolina, USA], "Keynote: Towards a Critical Memory: Some German Reflections"

Comments by Prof. Mari Nomura [Kanazawa University, Japan], and Prof. Naoki Odanaka [Tohoku University, Japan]

## Session I: Dialogue and/or Conflict between Neighbours

Dr. Zuzanna Bogumił [Warsaw, Poland] "Polish Experiences of History and Memory Dialogues, and Conflicts with Eastern and Western Neighbors"

Prof. Satoshi Ikeuchi [Nagoya University, Japan] "The Japanese Government's Understanding of Takeshima / Dokdo before 1905"

Dr. Yudai Anegawa [Chiba University, Japan] and Dr. Hiroshi Fukuda [Aichi University of Education, Japan] "Memory and History Conflicts between Slovakia and Hungary"

Discussion and Comments by Prof. Satoshi Koyama [Kyoto University, Japan]

## Session II: Memory Politics / Memory Legislations

Prof. Jury V. Kostyashov [Kaliningrad, Russia] "Politics of Memory of USSR / Russia on the lands of former East Prussia: Motives, Tendencies and Outcomes"

Dr. Soyoun Lee [Jeju, South Korea] "'Taking Laughter Seriously': The Politics of Memory in Regulating Jokes on Korea's Colonial/ Dictatorial Past"

Discussion and Comments by Prof. Tatsushi Fujihara [Kyoto University, Japan]

## Session III: Role of Historians and Social Scientists

Prof. Jie-Hyun Lim [Seoul, South Korea] "Historians at the Aporia of Past: from Fact Interrogator to Memory Activist"

Dr. Olaf Mertelmann "Conflicting Memories or Turning the Past into History?: A Task for European Historians"

Prof. Shin'ichi Yamamuro "Between the War of History and the Reconciliation of History: On the Duality of 'Warriors' and 'Arbitrators'"

Discussion and Concluding Comments by Prof. Shiokawa Nobuaki [Tokyo, Japan]

歴史認識や記憶をめぐる政治的な紛争化をユーラシアの東西にまたがるグローバルな観点から捉えるこの試みは他に類例がなく、参加した招聘外国人研究者からも高い評価を得た。カンファレンスの研究報告をもとに、報告者による加筆修正や追加執筆者の新稿を含めた日本語版論集として 2017 年に向けて刊行予定であり、英語版の出版の可否についても検討中である。

## 出版などの成果刊行

本研究の成果としては、上述の国際カンファレンスの成果に基づく論集の出版準備に加えて、以下のような出版等の企画化と取りまとめが現在進捗中である。

研究課題の目的全般については、研究代表者の橋本が『記憶の政治--ヨーロッパの歴史認識紛争--』(岩波書店、2016年4月)を執筆・出版して、とくにエストニア・ラトヴィアに焦点を当てながらも、ロシアや欧州国際機関との関係で歴史認識や記憶が国際的に政治紛争化する様態について解明を行うとともに、ロシアの歴史政策を通じてそれが東アジアの歴史認識紛争にまで接続されていることを明らかにした。

研究目的の下位課題に掲げた各国の歴史政策関連機関の活動とその成果や二国間歴史対話の動向については、すでに研究成果の取りまとめが済みであり、後掲の通り『ロシア・ユーラシアの経済と社会』誌の2015年6月号の「特集・中東欧、ロシアの歴史・記憶政治」として公刊した。

代表者・分担者・協力者はそれぞれ後掲の通り本研究課題に基づく個別研究成果の発表を行ってきたが、全員が執筆する論集の出版もすでに具体化されており、原稿執筆段階にある。同書は、上記『ロシア・ユーラシアの経済と社会』誌で示した各国の歴史政策機関についてのより詳細な紹介を行う第一部と、それぞれ担当する国・地域の歴史・記憶政治上重要なトピックを設定した第二部の各論からなり、東中欧・ロシアの歴史・記憶政治とその紛争化について、具体的な像を提示することができるであろう。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計37件)

1. Nobuya Hashimoto, Different Memories of Dictatorship and Conflicts: the Baltic States, Central and Eastern Europe, and

- Russia, Paul Corner and Jie-Hyun Lim (eds.), *The Palgrave Handbook of Mass Dictatorship*, Palgrave-Macmillan, 査読有 (In printing).
2. 橋本伸也・森下嘉之・福田宏・吉岡潤・姉川雄大・高草木邦人・小森宏美・梶さやか・立石洋子「【特集】中東欧、ロシアの歴史・記憶政治」『ロシア・ユーラシアの経済と社会』第1005号、2016年、1-48頁、査読無。
  3. 野村真理「ホロコーストとルーマニア(後編)」『金沢大学経済論集』第36巻第2号、2016年、5-44頁、査読無。  
<http://dspace.lib.kanazawa-u.ac.jp/dspace/handle/2297/44908>
  4. 野村真理「ユダヤ人ネットワークの実像と虚像--「世界イスラエル連合」から『シオンの賢者の議定書』へ」『東欧史研究』第38号、2016年、73-79頁、査読無。
  5. 小森宏美「『非・国民』--新たな選択肢、あるいはラトヴィアの特異性について」村上勇介・帯谷知可編『融解と再創造の世界秩序』青弓社、2016年、116-136頁、査読無。
  6. 福田宏「ロック音楽と市民社会、テレビドラマと民主化--社会主義時代のチェコスロヴァキア」村上勇介・帯谷知可編『融解と再創造の世界秩序』青弓社、2016年、137-160頁、査読無。
  7. 立石洋子「現代ロシアの自国史教科書の動向--20世紀史の描写を中心に」『東北アジア研究』第20号、2016年、133-146頁、査読無。  
<http://ir.library.tohoku.ac.jp/re/handle/10097/62982>
  8. 橋本伸也「歴史と記憶の政治とその紛争化--中東欧・ロシアにおける歴史認識問題とそのグローバル展開」『歴史学研究』第931号、2015年、41-48頁、査読無。
  9. 橋本伸也「反ファシズム英雄から戦争犯罪人への転落と反転--コーノフ裁判とヨーロッパの歴史・記憶紛争」『スラヴ研究』第62号、2015年、1-27頁、査読有。  
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publictn/slavic-studies/62/>
  10. 橋本伸也「多重化された「東・西」と歴史認識問題--ヨーロッパにおける歴史・記憶紛争を素材として」『思想』第1091号、2015年、69-91頁、査読無。
  11. 野村真理「ホロコーストとルーマニア(前編)」『金沢大学経済論集』第36巻第1号、2015年、1-33頁、査読無。  
<http://dspace.lib.kanazawa-u.ac.jp/dspace/handle/2297/44890>
  12. 小森宏美「再国民化と脱国民化に直面するエストニアの歴史教育--教科書比較の視座から」『早稲田教育評論』第29巻第1号、2015年、151-165頁、査読無。
  13. 福田宏「ロシアとヨーロッパ--狭間の地域研究」『地域研究』第16巻第1号、2015年、8-15頁、査読有。
  14. 福田宏「「危機の時代」における西と東の狭間」『地域研究』第16巻第1号、2015年、110-117頁、査読有。
  15. 立石洋子「現代ロシアの歴史教育と第二次世界大戦の記憶」『スラヴ研究』第62号、2015年、29-57頁、査読有。  
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publictn/slavic-studies/62/>
  16. Ё. Татэиши (立石洋子) Сталинская эпоха в учебниках истории современной России: К вопросу об освещении Второй Мировой войны // Политические и социальные аспекты сталинизма: новые факты и интерпретации. Под ред. С. Папкова и К. Тэраяма. РОССПЕН, М., 2015, с.186-209. 査読無
  17. 重松尚「リトアニアにおける「ジェノサイド」--その言説の系譜と国内法における定義」『ロシア・ユーラシアの経済と社会』第994号、2015年、31-45頁、査読無。
  18. 橋本伸也「「戦後史学」の捉え方、望田史学の継承と批判」『ゲシヒテ』第7号、2014年、59-70頁、査読無。  
[http://dogenken.web.fc2.com/gesch7/gesch7\\_43-70.pdf](http://dogenken.web.fc2.com/gesch7/gesch7_43-70.pdf)
  19. 野村真理「ナチ支配下ウィーンのユダヤ人移住におけるウィーン・モデルとゲマインデ」『ユダヤ・イスラエル研究』第28号、2014年、24-34頁、査読有。
  20. 吉岡潤「失われた東部領/回復された西部領--ドイツ・ポーランドの領土とオーデル・ナイセ国境」『ドイツ研究』第48号、2014年、29-42頁、査読無。
  21. Yoko Tateishi, Reframing the “history of the USSR: The “thaw” and changes in the portrayal of Shamil’s rebellion in 19-th century North Caucasus, *Acta Slavica Japonica*, vol.34, 2014, pp.95-114, 査読有。  
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publictn/acta/34/a34-contents.html>
  22. 姉川雄大「東欧現代政治から見た「市民社会」」、広田照幸他編『福祉国家と教育--比較教育社会史の新たな展開にむけて』昭和堂、2013年、287-300頁、査読無。
  23. 梶さやか「ポーランドとその過去--国民



記憶院の活動」『カレントアウェアネス』第318号、2013年、2-4頁、査読無。

<http://current.ndl.go.jp/ca1805>

〔学会発表〕(計16件)

1. Nomura Mari, Inter-Ethnic Relations in Colonial Manchuria: Russians, Jews and Japanese, ICCEES (International Council for Central and East European Studies) IX World Congress, 4 August 2015, Kanda University of International Studies, Chiba.

2. Yoko Tateishi, Soviet Historians during the era of Stalinism and the Thaw, ICCEES IX World Congress, 4 August 2015, Kanda University of International Studies, Chiba.

3. 吉岡潤「ポーランド現代史における被害と加害--歴史認識の収斂/乖離と歴史政策」, 日本西洋史学会大会、2015年5月17日、富山大学(富山県富山市)

4. Hiroshi Fukuda, Is Trianon still Alive?: Border Issues between Slovakia and Hungary after WWII, The 5-th East Asian Conference on Slavic Studies, 9 August 2013, 大阪経済法科大学(大阪府八尾市).

5. 福田宏「『東欧革命』への『長い』軌跡--『正常化』時代における非言語的象徴の機能」, 比較政治学会、2014年6月26日、東京大学(東京都文京区)

6. Yoko Tateishi, Soviet History Education in Putin's Russia, The 6-th East Asian Conference on Slavic Studies, 21 June 2014, Hankuk University of Foreign Studies (Seoul, Korea).

7. 吉岡潤「失われた東部領/回復された西部領--ドイツ・ポーランドの領土とオーデル・ナイセ国境」, 日本ドイツ学会(招待講演) 2013年6月22日、お茶の水女子大学(東京都文京区)

8. 野村真理「未完の戦争--東部戦線によせて」, 日本西洋史学会小シンポジウム(招待講演) 2013年5月12日、京都大学(京都府京都市)

9. 橋本伸也「二重化された「東・西」問題/歴史と記憶の紛争」, 日本西洋史学会大会シンポジウム(招待講演) 2013年5月11日、京都大学(京都府京都市)

〔図書〕(計6件)

1. 橋本伸也『記憶の政治--ヨーロッパの歴

史認識紛争』岩波書店、2016年、224頁。

2. 小森宏美編『変動期ヨーロッパの社会科学教育--多様性と統合』学文社、2016年、124頁。

3. 吉岡潤『戦うポーランド--第二次世界大戦とポーランド』東洋書店、2014年、77頁。

4. アンドレス・カセカンブ、小森宏美・重松尚訳『バルト三国の歴史--エストニア・ラトヴィア・リトアニア 石器時代から現代まで』明石書店、2014年、370頁。

5. 野村真理『隣人が敵国人になる日--第一次世界大戦と東中欧の諸民族』人文書院、2013年、150頁。

6. 研究組織

(1)研究代表者

橋本 伸也 (HASHIMOTO, Nobuya)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号: 30212137

(2)研究分担者

野村 真理 (NOMURA, Mari)

金沢大学・経済学経営学系・教授

研究者番号: 20164741

小森 宏美 (KOMORI, Hiromi)

早稲田大学・教育総合科学院・教授

研究者番号: 50353454

吉岡 潤 (YOSHIOKA, Jun)

津田塾大学・学芸学部・教授

研究者番号: 10349243

福田 宏 (FUKUDA, Hiroshi)

愛知教育大学・教育学部・講師

研究者番号: 60312336

姉川 雄大 (ANEGAWA, Yudai)

千葉大学・アカデミックリンクセンター・特任助教

研究者番号: 00554304

梶 さやか (KAJI, Sayaka)

岩手大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号: 70555408

(平成25年度・平成26年度研究分担者)